

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820056

研究課題名(和文) ポストコロニアル・モーリシャス共和国における英語とクレオール語の共生に関わる研究

研究課題名(英文) Research on the Use of English and Creole in Postcolonial Mauritius

研究代表者

ソジエ内田 恵美 (SOJIE UCHIDA EMI)

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：00350405

研究成果の概要(和文)：

モーリシャス共和国は植民と移民の歴史から成り立ち、インド・中国・アフリカ・ヨーロッパ・ミックス系と多民族・多言語社会である。モーリシャス共和国は1968年の独立以来、砂糖黍の単一産業による植民型経済から、繊維・観光・ITなどからなる複合型経済へと変革を成功させ、アフリカ圏随一の高い経済発展を経ている。グローバル経済への参加は、英語・仏語といった旧宗主国言語を国際共通語として促進する傾向が強いが、各政党はその動きとは逆に、支持基盤確保を狙い、モーリシャス独自の言語であるクレオール、祖先の言語にあたるインド系や中国系言語を優遇する政策を掲げてきた。本研究では、社会的特徴が異なる中学校六校の生徒562名と教員45名にアンケート・インタビューを行い、その言語状況を調査した。

参加者は全員多言語話者であり、典型的な例として、家族や友達とはクレオール、学校の教員とは英語・仏語、宗教儀式はヒンディー、アラビア語、仏語、Eメールでは英語・クレオールと、使い分けることが多い。学校で使用される教授言語は、英語のみが一番多く、英語・仏語・クレオールの混合型が続いた。都市校よりも田舎校の教員はクレオールを含む多言語を使用し、生徒の満足度も高い。クレオールに対する態度にも都市・田舎での差異がみられ、田舎校ではクレオールにより好意的な意見が多い。田舎校では、クレオールは指導言語として使用されるべきと考え、またクレオールの綴りが標準化されるべきと考える生徒の割合が高い。言語に対するイメージとしては、英語・仏語は概ね、社会・経済的成功をもたらす権威ある国際語として認識されており、歴史上植民宗主国から強制された言語との見方はほとんどない。祖先の言語は年配者や祖先の文化への尊敬の念を示すものとして捉えられるが、実用的でないとの意見も顕著である。クレオールはモーリシャス人としてのアイデンティティを形成すると考えられるが、学習意義に対する意見は多岐に渡る。

モーリシャスの若い世代は植民地としての過去に囚われることなく、その独自の多文化性を誇り、国際社会における経済的成功を重視する傾向が強い。母語(日本語)における教育が基盤となっている日本は、植民地としての過去を持つモーリシャス共和国とは社会・歴史・経済的状况が大きく異なる。しかし、グローバル化が進むにつれ、英語などの目標言語を指導言語とするイマージョン教育は、その重要性を増してきた。そのため、モ

ーリシャスの教育制度に見られるようなアプローチで、初期から外国語を使った教育を導入する必要があるだろう。しかし、本研究で田舎校の教員がクレオールの使用で示唆したように、生徒に外国語で学問の本質を学ばせるため、そしてそれを確かめるためには、母語による教育は不可欠である。

研究成果の概要（英文）：

The Republic of Mauritius is a postcolonial multilingual nation with 1.2 million inhabitants of Indian, African, French and Chinese descendents. Since its independence in 1968, Mauritius has come to be one of the most economically successful countries in Africa, moving from a sugar cane production economy to a more diversified model with strong services, textile, tourism, BPO and IT industry sectors. This study was carried out through the use of questionnaires distributed to and interviews conducted with 562 students and 45 teachers attending 6 secondary schools of varying statuses.

All participants were multilingual and switched languages depending of the environment they were in. For example, they spoke Creole to friends and family, English and French to school teachers, Hindi, Arabic or French in religious ceremonies, and English and Creole when communicating by email or online chatting. The language of instruction at school was primarily English followed by a less frequent use of French and Creole. Creole was more popular among rural school teachers as compared to urban school teachers. There was a higher ratio of students in rural school who considered that Creole should be used as a language of instruction and that the spelling of Creole should be standardized. In general, English and French were considered as being internationally recognized languages associated with socio-economic success and prestige rather than the languages of former colonists. The ancestral languages were associated with the respect to ethnic and cultural origins but were also widely considered as not having great practical value. Creole was considered as being intrinsic to the Mauritian identity but views differed as to whether it should be made a formal national language. All in all, younger Mauritians were proud of their multicultural heritage and had a tendency to part with their colonial baggage and gave more value to economic success.

Japan differs greatly from Mauritius inasmuch as Japanese education is founded on Japanese social, historical and economic paradigms and is taught almost invariably in the Japanese mother tongue. The ease with which Mauritians can dissociate the language in which education is being proffered and the substance of what is being taught is probably enhanced by their past colony status. However, due to increased globalization, immersion programs where the target language (such as English) is also used as a medium of instruction have increased in importance. As such, we would

stand to benefit from taking a similar approach to that currently embraced by the Mauritian education system. We would, however, pay due regards to the fact that the mother tongue is essential for ensuring and/or confirming that the students have grasped the essence of what is being taught in a foreign global language. The example given would be that of Mauritian rural area teachers using Creole to supplement gaps of understanding faced by their students.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
21年度	780,000	234,000	1,014,000
22年度	870,000	261,000	1,131,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,650,000	495,000	2,145,000

研究分野：応用言語学

科研費の分科・細目：

キーワード：言語政策・英語教育・マルチリンガリズム・ポストコロニアル・クレオール・イマージョン・アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

モーリシャス共和国は植民と移民の歴史から成り立ち、インド・中国・アフリカ・ヨーロッパ・ミックス系と多民族・多言語社会である。現在公教育では英語が教授言語として使用されているが、英語を母語とする者は国民の 0.3% にすぎず (Central Statistic Office, 2000)、公的・ビジネスの場以外、使用頻度は低い。ほぼ全人口が話すのはクレオール語だが、いまだに仏語の乱れた方言として認知する者が多く、かつ綴り字が確定していないため、教育などの公の場で使われることはほとんどない。また、仏語は多くのモーリシャス人が日常使う言語だが、フランス系モーリシャス人という特権階級との繋がりが明確なため、大多数を占めるインド系や中国系国民からは、その公的使用は好まれない。その上、自らのアイデンティティを保つため、祖先の言語として、ヒンディー語・タミル語・北京語など 11 語が小学校から選択必修外国語として学習されている。

多くのポストコロニアル国家が精神の脱植民化を謳い、母語教育への回帰に揺れている今日においても、政治的に安定し経済的にも急速な発展を遂げているこの国では、依然として更なる発展に不可欠な英語による教育が支持されている。しかし、英語・仏語・祖先の言語と多くの言語学習を早期に要求される制度から脱落する子供たちは多く、小学

校卒業試験 (the Certificate of Primary Education) において 30~40% の生徒が規定条件を満たせず進学できない (Sonck, 2005) という負の問題も抱えている。

2. 研究の目的

本研究の主な目的は、小・中学校における教授言語が英語 (旧宗主国言語) であるモーリシャス共和国において、その教育効果と学習者の考え方に与える影響を調査し、分析することである。本研究は大きく分けて、以下の三つの調査を柱とする。(調査 1) 1930 年代から今日までの世論調査による言語使用状況を比較検討し、各時代の政治的、経済的、社会的な状況の転移と照らし合わせて今日の状況を分析する。(調査 2) 社会的特徴の異なる中学校数校を無作為抽出し、生徒と教員にアンケートとインタビューを行う。データの質的・量的分析を行い、学習者と教育者の意識や考え方を明示し、総合的に理解する。

(調査 3) 各校のカリキュラムや使用教科書を分析し、その影響を考察する。

3. 研究の方法

(調査 1) 1931~2000 年に行われた世論調査における言語使用状況を、各時代の政治的な流れや経済的な発展 (GDP) などの変数と比較検討する。

(調査 2) 社会的特徴の異なる中学校 (都

市・田舎／男子・女子・共学校)の生徒と教員にアンケートとインタビューを行う。データの質的・量的分析を行い、学習者と教育者の意識や考え方の実態を総合的に明らかにする。アンケートは主に選択式を採用し、数量的に傾向を明らかにするが、自由記述式も含む。従属変数としては、回答者の学校のレベル・場所・エスニシティ・性別・年齢を使用する。

(調査 3) 中学校でのカリキュラムや使用教科書を分析し、その整合性や効率性にも着目する。

4. 研究成果

モーリシャス共和国は1968年の独立以来、砂糖黍の単一産業による植民型経済から、繊維・海産食品・観光・BPO・ITなどからなる複合型経済へと変革を成功させ、アフリカ圏随一の高い経済発展を経ている。グローバル経済への参加は、英語・仏語といった旧宗主国言語を国際共通語として促進する傾向が強いが、各政党はその動きとは逆に、支持基盤確保を狙い、モーリシャス独自の言語であるクレオール、祖先の言語にあたるインド系や中国系言語を優遇する政策を掲げてきた。

本研究では、社会的特徴が異なる中学校六校の生徒562名と教員45名にアンケート・インタビューを行い、(A)祖先の言語(B)本人がさまざまな社会状況で話す言語、(C)教授言語と満足度、(D)クレオール語を教授言語とする制度に対する意見、(E)英・仏・クレオール・祖先の言語に対するイメージ、などの調査を実施した。その結果の要旨は以下の通りである。

(A)祖先の言語(複数回答)で多い順は、クレオール、仏語、英語、ボジュプリ、ヒンディー、ウルドゥー。

(B)参加者は全員多言語話者であり、典型的な例として、家族や友達とはクレオール、学校の教員とは英語・仏語、宗教儀式はヒンディー、アラビア語、仏語など、Eメールでは英語・クレオールと、使い分ける。

(C)学校で使用される教授言語は、英語のみが一番多く、英語・仏語・クレオールの混合型が続いた。都市校よりも田舎校の教員はクレオールを含む多言語を使用し、生徒の満足度も高い。

(D)クレオールに対する態度にも都市・田舎での差異がみられ、田舎校ではクレオールにより好意的な意見が多い。田舎校では、クレオールは指導言語として使用されるべきと考え、またクレオール語の綴りが標準化されるべきと考える生徒の割合が高い。また、都市校ではモーリシャスで推奨されるべき言語として、英語>仏語>祖先の言語>クレ

オールの順であったが、田舎校では英語>仏語>クレオール>祖先の言語であった。これは田舎校での生徒が、主にヒンドゥー教徒とイスラム教徒からなり、インド系エスニシティを保持する、いわゆる保守層であることを考慮すると、興味深い。彼らは、モーリシャスでは、インド系言語を含む祖先の言語は消滅しつつあり、かわりに共通語としてのクレオールを自分たちの言語として認識し、その価値を認めている。

(E)言語に対するイメージとしては、英語・仏語は概ね、社会・経済的成功をもたらす権威ある国際語として認識されており、歴史上植民宗主国から強制された言語との見方はほとんどない。クレオールは社会的汚辱から解放され、概ねモーリシャス人としてのアイデンティティを形成すると考えられている。しかし、学習意義に対する意見は多岐に渡る。祖先の言語は年配者や祖先の文化への尊敬の念を示すものとして捉えられるが、実用的でないとの意見も目立つ。

モーリシャスの若い世代は植民地としての過去に囚われることなく、その独自の多文化性を誇り、国際社会における経済的成功を重視する傾向が強い。自然資源が限られた国であるためか、初期教育の重要性は強く意識され、カリキュラムや教科書は社会的成功のための実用的な知識・スキルを重視する傾向が強い。教員の姿勢からも、国際社会で生き抜くためには英語・仏語の重要性はまず第一と考えられている。しかし、同時に多民族国家をまとめるためのクレオールの重要性も多くが認め、とくに田舎における初期教育では無視できない。

母語(日本語)における教育が基盤となっている日本は、モーリシャス共和国とは状況が大きく異なる。しかし、英語などの目標言語を指導言語とするイマージョン教育は今後更に必要になっていく。そのため、基礎となる語学力は初期教育から鍛える必要があるだろう。これから始まる日本の初等教育からの英語教育の成果が中期的な視点から注目される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

現在論文を執筆中。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ソジエ内田 恵美 (SOJIE UCHIDA EMI)

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：00350405